

特集 ハンディキヤップを抱えた子どもたち

子どもたちがなにかと追い込まれている。

非行、荒れ、いじめ、不登校、虐待、アレルギー、体力低下、発達障害等々。

関係者たちによる必死の努力にもかかわらず、解決にはほど遠い。

昨年、不登校発生率が始めて減った。だが一概に評価はできない面がある。出席とみなす基準の緩和も見られる。生み出す要因は深まりこそすれ何ら解決されていない。

特殊教育の対象となる子どもたちも増える一方であり、一〇年前に比し五割増しとなっている。さらにLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、高機能自閉症等新しい問題もクローズアップされてきている。

当事者あるいは関係者の苦しみ、苦勞はいかほどであるうか。

こうした中、教育行政はこのような課題に十分に配慮していない。文科省の特別支援教育は、一人一人の子のプランをつくる前進的意味はあるが、それに見合う予算が伴わないため、障害者を市場原理にさらす教育になる可

能性がある。予算、人員、条件整備を現状より低下させることなしにいっそう発展させる方向を確認したい。

そうした状況下、とりわけ多くの子どもたちが苦しんでいる不登校問題と障害児教育に焦点を当ててみた。不登校問題では、全国的にも珍しい長岡の不登校父親の会から参加してもらった。障害児教育では、さまざまな関係者から登場して頂いた。

ハンディキヤップを抱えた子どもたちが尊重され、大切にされる教育こそ重要である。弱い立場にある子どもたちに、十分な教育を施すことは、子どもたちの世界を豊かにし、過度の競争主義的教育体系を壊していく。すなわち教育全体の質を高めていくことに通じていく。

障害児教育が大変革期にある今、ますます共通課題として大切な視点でないだろうか。

我が新潟県内において、どんな実態がみられるのか。

その一面を特集した。まずはその共通認識を深めること。そこから子どもたちを中心に、親、教師、地域、行政が協力しあって取り組みが発展していくと思われる。そのための一助となれることを願っている。

(編集部)